

No. 134号

OB・Gニュース

二〇一八年六月一日

発行責任者

社民党がんばれOB・G福島の会

メール [huruya.michitatsu@orange.plala.or.jp](mailto:huruya.michitatsu@orange.plala.or.jp)

ピンポンに

やっと出たのに

不在票

(シルバー川柳より)

## 「給付と負担」逃げずに討論を

今、どうしても触れなければならぬものに「大義名分なき解散・総選挙」がある。2014年11月の強行解散は「消費税引き上げの先送りを国民に問う」というものであった。しかし、内実は小渕優子前経産相の政治資金不正支出問題など政治とカネの問題、さらにアベノミクス政策自体の失策を隠すためのものであったことは明らかである。そして600億円を超える税金を使って安倍内閣は「生き延び戦術」をとり、結果して安定勢力を確保した。

そして2017年12月である。安倍首相は再開国会の冒頭、しかも所信表明もなく解散を強行した。「消費税増税分の使途変更」や「北朝鮮問題への圧力路線」について国民の信を問うというものであった。つまり8%から10%に引き上げられる消費税増の約5兆円のうち約4兆円を国の借金返済に。約1兆円を社会保障の拡充にあてるとしてしたが、その一部分を借金の返済ではなく教育無償化の財源にあてられるという「使い道の見直し」という「大義」であった。もちろん緊迫を求めている北朝鮮の状況が国民をして「1強政権を醸成させたことは残念である

が否定できない。そして「社会保障財源を争争の具とはしない」と言う民・自・公の3党合意の基調をも破り再び税の乱費を強行した。

### 政治まかせにせず・自分の問題として

さてこの社会保障である。社会保障費の自然増の抑制は常に焦点となつていいる。政府はこの自然増抑制を2016〜2018年度の3年間で1.5兆円に抑えるとの目安を定めた。しかし、社会保障の道筋さえも示していない。そして抑制の標的になつていいるのが医療・介護・そして年金といった高齢者福祉である。そこに「高齢者は早く死ねと言ふのか。それは悲しくなる」「医療や介護の自己負担が増えて暮らしくくなる。仕方ないと思うが他に対策はないのか」といった声が生まれる。これらの不安を取り除くために社会保障制度をどう維持していくのか。この問題を政治や一部学識者だけに任せで良いのだろうか。とりわけ、その当事者である私たち高齢者と、その予備軍が自らの問題として考え行動するのが今と思ふがどうだろうかと皆さんに聞きたい。

少子高齢化はこれからも進み2040年頃には1971〜1975年生まれのすべてが65歳以上となり高齢者数がピークを迎える。

2040年はどんな社会になつていいるのだろうか。国立社会保障・人口問題研究所の推計では、人口は現在よりも1600万人少ない1億1100万人に減る。それでも高齢者は増え続け75歳以上は500万人も増えて2240万人に達し5人に1人が後期高齢者という社会が到来する。75歳以上の人が半数を占める自治体も出てくる。地域によっては担い手不足で、十分な医療や介護サービスの提供ができなくなる可能性もある。一方で医療や介護、年金などの社会保障にかかる費用は膨張する。民間シンクタンク「NIRA総合研究開発機構」の試算では、2041年度には190.7兆円に膨れ上がる。特に介護費の伸びは著しく9.6兆円から30.4兆円と3倍以上になる見通しだと報告をしていいる。

この間OB・G全協運営委員会は、社民党中央に「2025年問題検討委員会」の設置を提唱してきた。それは段階世代が後期高齢者に到達する前に、抽象的スローガンからより具体的施策を持たなければならぬからである。残念であるが7年後ましてや2040年代には私たちは存在していいない。そうであるがゆえに強調したい。「給付と負担」について逃げずに討論しなければならぬと思う。そのためにもより前向きなそして具体的な政策の提示を社民党に求めたい。



## 【寸評】

### 「詭弁の社会」

#### モラルが崩壊した国会



政治評論家である森田実氏の記事が毎日新聞にあった。保存していたので紹介をしたい。

(毎日新聞2018年3月16日・東京夕刊)

「『詭弁(きべん)の社会』の到来です」と嘆き悲しむのは政治評論家の森田実さんだ。

「『詭弁の社会』とは何か。当たり前の、ますますな道義感が薄れた社会です。国民の範たる国会で、最低限の道徳観をも打ち破るような物言いをする指導者が喜ばれるようになってしまった」 例えば2月26日の衆院予算委員会でこんな一幕があった。2012年の衆院選で落選し、昨秋に返り咲いた立憲民主党の本多平直氏の質問のことだ。話題の森友学園問題で妻昭恵氏の関与の有無を改めて問われた安倍首相は、答弁に立つたばこんな「枕ことば」を挟み込んだ。(本多氏は)議員でおられなかったからご存じないかもしれませんが、昨年の国会で何度もご説明申し上げています」と。わずか数分のやり取りの間に3回も「この場におられなかったから」を繰り返して、最後に本多氏は「失礼なことを言うな」と怒り出して審議がストップしてしまった。聞きよによって、落選中だったことをあげつらうかのような言葉である。

「誠実に、真つすく答えるのではなく、相手をあざけるかのような応対をする。そうする

と、自分の支持者が『うまい』と喜ぶからです。モラルが崩壊している」

詭弁だけではなく「嘘」も横行する国会も政治も品位が落ちたと私も言いたい。

### 「高齢者の足を守る郡山市民の会」

#### 第二回行政協議開催

「高齢者の足を守る郡山市民の会」は2017年3月31日に結成しました。以来運営委員と社民党議員団による調査、研究の中から、郡山市に対して7つの要請項目をまとめ昨年12月21日に第一回の郡山市との協議の場を持ちました。要請事項をめぐる若干の質疑討論を行いました。市民の会との協議は引き続き継続していくことが品川市長同席の中で確認されました。そして今般3月26日に「市民の会」が改善を求めた7項目に対する市の回答が示され、これを受けて5月24日(木)に第二回の協議会が開催されました。

郡山市は吉崎賢介副市長・関係所轄の部長。市民の会は佐藤幸夫会長他運営委員と社民党市議団が参加をしました。

郡山市が示した回答に対する「市民の会」の見解は、同席で表明をした佐藤幸夫会長の次の言葉に尽きるものです。

「今回の回答を見る限り、市は財政を理由に実現が困難であるとの回答に徹しています。しかし現状の認識についての分析も今後の方針も具体的なものではありません。私たちは以

前から高齢者、若者が一体となり、買い物・病院・介護施設など住みやすい街づくりを提案してきましたが「金がかかる」を理由に対策ができないまま放置されてきたことを指摘いたします。また市は、国の補助制度がない限り手を付けられないものとなっています。市は「無策か」と言わざるを得ません。まず一歩踏み出してみてほしい。項目5の70歳以上のサポート利用券の4820万円などは即可能だと思えます。今後の協議については、第一回の確認通り引き続き意見の交換の場を設けることを求めます」

引き続き協議となりましたが「市民の会」の意見の一部を紹介します。

「運転免許返上者に対する5000円交付は額面からも説明がつかない。返納の決意を促す金額としては余りにも少額である。また返納をした後になる公共の交通機関利用を保証するものとしての説明とはならない」

「デマンド交通(相互乗合バス・タクシー)を検討するにしても極めて抽象的である。具体的な構想が見えない。むしろ交通業者(バス・タクシーなど)に『この地域の高齢者がバス、タクシーなどの利用を促すとすればどのようなものがあるのか』という事業計画を立案させたかどうか。その意味での経営努力を求めても良いと思う」

最後に、今後は相互の研究と提案型の協議を持ちたいとの提案が受け入れられました。

# 【福島原発事故被災地見学報告No.1】

## 「人影のない街に心が痛む」

(河辺信雄さん・OB・G福島の会副会長)

4月26日、27日の両日、がんばれOB・Gの会・全国協議会の(会長・黒川 武氏)の主催で「福島原発事故被災地見学」が実施された。県外から9名、県内から8名の計17名が参加した。全国から仲間がわざわざお出でになるとのことから、福島の間としても可能な限りの協力をするので臨んだ。見学会はマイクロバスをレンタルし郡山駅を出発、川内村を皮切りに双葉郡各町村をまわり「2018年原発のない福島を「県民大集会」が開催された天神岬にあるサイクリングターミナルに宿泊し、学習と交流を深める充実したものと

なった。  
案内は富岡町の元生活環境課長をつとめられた白土正一さんをお願いをした。短い時間であったが、事故現場で実際に行政に携わり、苦労された白土さんだからこそ臨場感あふれる、分かりやすい説明をいただいたことに感謝申し上げたい。また今回の企画への参加者の一人でもある被災者の三春町に避難をしている林 正二さんの苦労話も、参加者の皆さんに教訓を訴えるものが多かった。

バスの車窓からながめる風景で特に目立っていたのは、おびただしい数の集積された除染廃棄物が詰まった黒いフレコンバッグ(県内に存在するもののごく一部でしかないのだが)

の群れと、ほとんど人影のない各町村の繁華街や壊れたままの家並みなど異常さを覚えずにはいられなかった。そのことは早々と安倍首相が発した出まかせのアンダーコントロールがいかにまやかしかつてあつたかを明確に物語っている。

政府・東電のあれやこれやの対策で、いかにも復興の準備が整ったとして住民に帰還を押し進めようとしている。しかし7年前からの時計は止まっているような各町村の実態を見るにつけ、スリーマイル島やチェルノブイリの原発事故を引き合いに出すまでもなく、ひとたび過酷事故を起こしてしまえば、現状で人類の手に負えないものあることを痛感した。最後に、忙しい時間を割いて私たちに説明をしていただいた川内村の猪狩副村長、秋元教育長、畜産農家の志賀さん、原発事故関連の貴重な写真集をお貸しいただいた写真家の飛田晋秀さん、レンタルバスを安全に運転していただいた小林國八さんはじめお世話になった皆さんに心からお礼を申し上げます。そして県内・外からこの企画に参加いただいた皆さんに「今後もそれぞれの地でがんばりましょう！」とエールを送ります。

### 「被爆被災地は今!!」

(渡辺 二公さん・猪苗代町)

自民党と原子力村の意向が再び強くなってきており、非常に危険な状態が見え隠れしています。国や福島県が7年前に取った行動には大きな誤りが含んでいました。現場で救助に

当たって炊いた消防隊員・警察官が、水素爆発による避難命令に従い、救いを求めている人々を目前にしながらその場を離れざるを得なかったことなどは、安全神話により決断できなかった自治体の弱さの一例だと思えます。そして減力発電の危険を知らながら導入をした国と県の判断は最たる間違いであつたと指摘しなければなりません。

「原発事故がなかったら」との書き置きを残して死を選んだ農民のいたこと、直接に原発事故で死亡者はいないと答えた政府高官のいたことにも怒りは倍加します。とりわけ甲状腺障害に対する県のあり方に不安と動揺を与えたこと、医療に信用が持てなくなった子どもの親たちの心情を考えると強い不満を持ちます。

チェルノブイリでは、国が子どもたちに安心と休養を与え、ストレスの解消に努める場を提供しているということを聞きました。これに対し、日本の現実には防衛予算に5兆円を超える金額を押しもなく乱費し、さらにアメリカのロケット兵器の購入に大金を投げ出すなどの記事にも怒りを持ちます。

しかも原発基地に流れ込む地下水対策には不確かな表土凍結の工法で大手企業を潤しています。そして基地内に存在する大量の廃水タンクをどうするのでしょうか。こつそりと投げ捨てるのではないかと東電への不信を持つのは私だけでしょうか。



## コーヒータイム



母の大好きな畑仕事のため

贈った電動車いす、踏切で悲劇

(5月5日(土) 毎日新聞)

事故は3日午後7時5分ごろ起きた。警報音が鳴り遮断機が降りた踏切内で、最賀さんは新宿発松本行きの特急「あずさ27号」にはねられ即死した。4輪のハンドル型電動車いすの後ろに立ち、特急に手を振っていたという。署は乗っていた電動車いすが立ち往生し、止まるよう合図を送っていたとみている。

「おばあちゃんは畑仕事が生きが良かった。近所の人に、畑で作ったカボチャをよくあげていました」と。事故から二夜明けた4日、長男の実さんと妻の典子さんは苦しい胸の内を明かした。

最賀さんは数年前に大腿(だいたい)骨を骨折したが大好きな畑に1時間近くかけて歩いて通っていた。その姿を見て実さんたちが、約1年前にプレゼントしたのが「電動車いす」であった。今回の事故は、畑から自宅に帰る途中に起きたとみられている。

最近はずっかり操作に慣れた様子だった。「プレゼントしなければよかったという後悔の気持ちもある。でもおばあちゃんの生きがいを支えてくれた大切な移動手段。使う側も周囲も一緒になって電動車いすを安全に使え

る社会を考えていければ」と声を振り絞った。自転車そして車いすの走行は歩道が原則となっている。しかし現在の歩道が果たして安全なものになっていくだろうか。いたるところに段差あり斜面ありとなっている。ましてや10メートルの踏切を渡り切れない足の不自由なお年寄りはいらざるう。レールの段差が車いすの走行を邪魔したとするなら、社会的責椅子任を果たしていないと言っても過言ではない。

### OB・Gニュース

#### 改めて確認をした「居間への手配り」

この日は月一回のOB・Gニュースを持つでの訪問である。

郡山地区の会は運営委員8名が手分けをしてニュースの会員宅配布を行ってきた。月一回とはいえ訪問は大変である。とりわけ冬の降雪時の配布行動は「安全運転」に心掛けるとはいえ、路肩に乗り上げるなど苦労が多い。しかし、その苦労も訪問先での会員からのねぎらいの言葉で忘れる。ありがたいものがある。とりわけ家族の方が玄関まで出られて「ご苦労様の言葉」は嬉しい。

さて小生であるが昨年6月に車の免許を返上した。80歳になったらと決意をしていたが1歳オーバーしてしまった。以来、電動三輪自転車「愛車」となった。そして17軒の会員宅を回り、残りの3軒は路線バスの乗り継ぎである。そこでMさん宅を訪問した時のこと

である。普通は玄関先で奥さんも加わり話題に花を咲かせながらお暇をするのだが、この日は「話したいことがあるから」といって部屋に招かれた。脇にいた奥様が「バスの時刻があるのだから」とご主人を諫めるのだが「ちよつとで良いから」と。しかし奥様は恐縮される。そこで「いや大丈夫ですから」といって邪魔することになった。

話はチェルノブイリ原発の新聞記事を読み「本当に福島第一原発は廃炉ができるのか」と言うのが内容であった。そこから米国のスリーマイル島の原発のデブリの取り出しと、高レベルの廃棄物をネバタ砂漠の真ん中に作られたコンクリートの保管庫に運ばれたこと。しかもそれは「最終処分ではなく仮設である」という事実の報告となった。しかもスリーマイルのデブリは無事取り出しに成功したが「福島原発はその取り出しが困難である」とことを、NHKスペシャル・シリーズ「廃炉への道」(2014年4月20日)を材料に語り合った。バスの時刻を気にされご主人を叱っていた奥様も同席された。「ニュースを居間に届ける運動」とはこのような時間を取ることでありと同時に、そこに家族も含めた共同の討論の場が生まれることが私たちの運動の大切な場面であることを痛感した。そしてお招きいただいたMさんご夫婦に感謝をするひと時であった。「バスはちゃんと乗れました」。

